

【観念の下に】 第15回

前回、セガンが、〈理性がつくる観念〉の下に、〈感覚がつくる観念〉を考えていることを紹介しました。訳語として、「観念」と「概念」を逆にした方がよいかもしれませんが、ここから学びたいことは、子どもたちにある観念を獲得してほしいと教育を考えるとき、教えたい観念を明確にするだけでなく、その教えたい観念の下に、子どもはどういう観念をもっているのかまで考えることが大事になるということです。

これは、教材を何層かに分けてとらえる〈教材研究〉であると同時に、子どもたちがどのようにそれを獲得している途中なのかを見極める〈発達研究〉でもあります。

セガンは、アルファベットの読み方を教えることについて、「非常に限られた音と表象との間に前提とした関係を知れば、あらゆる世界が、読むことによって理解したと全く同じように、掴み取られる」と考え、この「音と表象との間に前提とし



た関係」の観念を「まぶしいばかりの発見の出発点」として、〈その上に〉アルファベットを構音順に教える実践をしています。

それが正しいかは検証し直さなければなりません。一歳過ぎると、「くるくる」と言いながら自分が回ったり、ハンドルのようなものを回したりできません。回転と「くるくる」という音には、何か感覚的なつながりがあり、それはソシユールのいうような百パーセントの恣意性ともいえないように思えます。そしてこの概念は「の」や「る」を書くときに応用されたり、風車をつくるときに使われたりすることを経て、また惑星の運動、発電機などの理解、天秤から力のモーメントへの理解へと発展していきますが、それらの観念の下にあり続けるのです。
(研究部・加藤聡一)

参考文献

エドゥアール・セガン(川口幸宏訳)『初稿 知的障害教育論 白痴の衛生と教育(一八四三年論文)』幻戯書房、二〇一六年、百ページ。